

# ノエマと心的ファイル

成瀬 翔<sup>1</sup>

## はじめに

周知のように、「フッサールのノエマ概念」（1969年）においてフェレスダールが提示した解釈は、フッサールのノエマとフレーゲの意義（Sinn）との類比を指摘し、現象学と分析哲学の新たな接点を見出した。しかし、フェレスダールが提示するノエマの「フレーゲ的解釈」については、様々な批判がなされてきたことも事実である。本稿の目的は、これらの批判がノエマのフレーゲ的解釈には当てはまらないというクリスティアン・バイヤーの議論（Beyer 2008, 2013）を参照しつつ、近年分析哲学において展開されている心的ファイル理論からノエマを解釈することである。

本稿の構成は以下のとおりである。第1節では、フェレスダールによるノエマのフレーゲ的解釈の概要を確認し、第2節ではその解釈に対して従来なされてきた批判を提示する。第3節では、バイヤーの議論を再構成し、これらの反論はフェレスダール＝バイヤーの解釈には当てはまらないということを示す。最後に第4節において、ノエマと心的ファイル理論の接点を明らかにし、ノエマ概念をめぐる議論に新しい光を当てることを目指す。

## 1. フェレスダールのフレーゲ的解釈

フェレスダールのノエマ解釈が「フレーゲ的解釈」と呼ばれる理由は、彼が Føllesdal 1969 においてフッサールに帰した 12 のテーゼがフレーゲの意味論の一般化とみなしうるためである。すなわち、フェレスダールは志向的状态ないし志向的作用と言語の意味とのパラレルな関係を指摘する。

フレーゲの見解では、文の意義は名前の意義と述語の意義のからなり、かつ命題

---

1. 名古屋大学文学研究科。e-mail: sho.naruse1987@gmail.com

的態度の内容である。フェレスダールは 12 のテーゼを提示し、フッサールのノエマ概念を特徴づける。とりわけ、本稿で論じられるノエマ解釈にかかわるのは以下の諸テーゼである。

1. ノエマ的意味は、意識がそれによって対象に関係するものである。
3. ノエマ的意味は、意識がそれによって対象に関係するものである。
4. 作用のノエマは、その作用の対象（つまり、その作用が差し向けられる対象）ではない。
5. まったく同一のノエマに、ひとつしか対象は対応しない。
8. ノエマは抽象的对象である。
12. この〔射映を通じて与えられる〕諸規定性のパターンは、〔「定立的」性格を含む〕「所与性様式 (Gegebenheitsweise)」とともにノエマを形作る。

(cf. Føllesdal 1969, pp. 73–80)

以下ではフェレスダールのフレーゲ的解釈の特徴を確認しよう。フェレスダールの解釈の中心となるのはテーゼ 1 である。このテーゼは「内包的存在者」の箇所を除けば、『イデーニ III』に見出される表現である。『イデーニ III』においてフッサールは「ノエマは一般に、意義 (Bedeutung) という理念を作用の全領域に一般化したものに他ならない」(Hua V, p. 89) と主張するが、この見解は、『イデーニ I』の §124 における主張と密接に関連する。

本来的には、意味作用 (Bedeuten) や意味という語は、言語領域すなわち「表現作用」の領域に対してのみ適用される語に過ぎない。しかし、これらの語の意味を拡大解釈し、そして適切な仕方に変容することは、ほとんど不可避であると同時に、認識論上のひとつの重要な進歩となる。そのようにして、それらの語の意味は、ある仕方でもエシス＝ノエマの領域全体に適用されることになり、したがってあらゆる作用に、たとえその作用が表現作用と絡み合っているまいが、適用されることになる。(Hua III/1, p. 256)

さらにフッサールは続けて、言語表現の場合には ‘Bedeutung’ という用語を使用し、

それ以外の志向的作用に関しては‘Sinn’を使用すると述べる<sup>2</sup>。このように広義に理解された意味、すなわちノエマの核としてのノエマ的意味は、言語表現によって表現される場合には、概念的に理解される<sup>3</sup>。

以上のようにフェレスダールはフッサールのノエマにおける〈意味〉の一般化という側面を指摘し、フレーゲ的意義との類似性を強調する。テーゼ 3, 4, 8 はそのために提示されたテーゼであるといつてよい。フッサールのノエマ論は、「作用—対象」という布伦ターノ的二項構造を、ノエマを媒介項とする「作用—ノエマ—対象」という三項構造に再構成する試みである。フェレスダールはこのフッサールの三項構造をフレーゲの「固有名—意義—指示対象」という三項構造の一般化ないし対応物と主張する。

フェレスダールのテーゼ 1 がノエマを内包的存在者であると規定するのに対し、テーゼ 8 はさらにノエマを抽象的存在者であると規定する。フェレスダールはこのテーゼ 8 を支持する文献的証拠として、『イデーニ I』の以下の箇所を挙げる。

樹木自体は自然の中の事物であるが、それはそのつどの知覚に知覚の意味（Wahrnehmungssinn）として切り離しがたく属している、あの樹木として知覚されたものそのもの（つまりノエマ）では絶対でない。樹木自体は、焼けてしまったり、化学的要素に分解してしまったり、ということがありうる。しかし、意味は—この知覚の意味、つまり知覚の本質に必然的に属しているものは—焼けてしまうこともないし、化学的要素に分解することもない。さらに、なんらの力も、なんらの実在的性質も持ちえないのである。（Hua III/1, p. 184）

ここからうかがえるのは、ノエマは実在的事物と完全に区別されなければならないという点である。フェレスダールは、フッサールの未公刊草稿「ノエマと意味」を典拠として、ノエマを無時間的な非実在的对象とみなし、さらに抽象的存在者としてみなす。つまり、フェレスダールの解釈するノエマの抽象性・無時制性は、フレーゲが表象の主観性と対比して、意義の客観性と思考からの独立性を強調する意義の存在論的身分と完全に対応するのである。

2. ここで注意しなければならないのが、フレーゲも‘Sinn’と‘Bedeutung’という用語を用いる点である。

3. しかし後述のように、ノエマ的意味そのものが概念的であるわけではないことに注意しなければならない。

## 2. フレーゲ的解釈への批判

しかし、フェレスダールの提唱する以上のようなノエマのフレーゲ的解釈は、近年においても様々な批判にさらされてきた。代表的な批判者であるダン・ザハヴィは、ノエマのフレーゲ的解釈が以下のような見解を採用してしまうことになると批判する。

- (1) 志向的内容についての内在主義 (cf. Zahavi 2004, pp. 47, 54)
- (2) 単称名辞の意味 (meaning) についての強い記述主義 (cf. Zahavi 2004, p. 46)
- (3) 志向的表象は抽象的対象によって媒介されると述べられるため、いかなる直接指示もありえないという主張

これらの論点は独立した問題ではなく、相互に密接な関連をもつと思われる。すなわち、(2) は (1) の内在主義批判を単称名辞の意味に縮約したものであり、(3) はさらに指示対象決定プロセスに限定したものである。そのため、諸批判を概観するために、内在主義にかかわる問題から始めよう。

### 2.1. 内在主義批判

内在主義とは、ある主体の信念と経験が、外界の環境と独立して、その主体の内部によって完全に構成されるという見解として通常定義される立場である。内在主義の観点からは、信念や経験の正当化の根拠が主体による何らかの形での了解という、認知的パースペクティブに内在的な要素が不可欠な条件とみなされる。したがって、ある主体の心的状態は、その内容に関していかなる外部要因にも依存しないと内在主義は考える (Kornblith 2001, pp. 1-2)。内在主義は経験の対象が経験の意味内容によって規定される、換言すれば意味内容を充足するとみなす。そのため、経験は主体の内在的意識のみによって対象と志向的に関係づけられることになる。つまり、内在主義によると、指示対象は世界がどのようなものであるかということとは全く独立に、主体の心的状態によって決定されるのである。この意味で、内在主義は「心の自己充足性」(self-containedness of the mind) と呼びうるテーゼを保持する。

他方、外在主義とは、ある主体の信念と経験が、主体の環境に対する関係によって影響を受けるという立場である。外在主義によると、われわれの心的状態の内容を担う文脈的要因は、環境における実際に存在するものに依存する。つまり、外在主義の観点からは、認識主体の認知的パースペクティブに外在的な事実として成立している関係が、信念や経験の正当化の条件とみなされる。このため、内在主義とは対照的に、外在主義では認識主体が信念や経験の正当化の根拠をなんらかの仕方

で了解しているか否かは、それらの正当化とは無関係であると考える。したがって、対象についての経験をなすものは、その内的構造ないし内容と対立するものとしての、経験の外的環境、経験の文脈である。たとえば、知覚対象は経験の内的内容によって決定されるのではなく、その文脈および因果的発端によって決定される。

以上のような内在主義と外在主義の議論を整理するために、分析哲学では「狭い内容」(narrow content)と「広い内容」(broad content)という概念を用いて議論が行われている。狭い内容とは、主体の心的状態ないし身体経験の点からのみ定義される内容であり、広い内容とは、主体の心的状態ないし身体経験の外部のものを含む内容である。この概念から内在主義を定式化すると、志向的对象ないし指示対象を決定するのは主体の狭い内容であり、外在主義では広い内容が対象を決定する。

しかし、内在主義には特有の困難が指摘されている。ザハヴィは次のような例を挙げる (Zahavi 2004, p. 43)。あるひとが目の前のトマトの缶詰を見ているとしよう。目を閉じたあと、彼はふたたび缶を見る。彼は最初に缶を見たときと、目を閉じたあとで見たときの両方で同一の対象を見ているように思っている。しかし、実際には彼が目を閉じている間に別の缶にすり替えられていたとしよう。その場合、われわれは彼の経験の狭い内容は同一であったが、その対象は異なっていたとみなすだろう。内在主義の主張者であるデイヴィッド・スミスも強い内在主義をとらず、このような問題を回避するために「文脈依存的内在主義」(context-sensitive internalism)と呼ぶ立場を主張する (cf. Smith 1989, p. 146)。スミスによれば、二つの知覚が同一の狭い内容をもつにもかかわらず、異なる対象をとりうる場合、それらの志向的方位付けは狭い内容のみではなく、経験の文脈にも依存しなければならない。

このように、狭い内容のみによって志向的对象を決定するという強い内在主義は困難がともなうことは明らかであるが、フェレスダールはテーゼ 1 において、「ノエマの意味は、意識がそれによって対象に関係するものである」と主張し、内在主義を示唆するように思われる。さらに、フェレスダールは、テーゼ 5 において「まったく同一のノエマは唯一の対象に対応する」と明示的に主張するため、このテーゼを否定する Smith 1989 によって定式化された文脈依存的内在主義の余地はない。したがって、仮にノエマのフレーゲ的解釈が強い内在主義をとるとすれば、ザハヴィの挙げるすり替えられた缶の例が適用され、困難に陥るように思われる。

## 2.2. 記述主義批判

内在主義にかかわる問題は単称名辞の意味をめぐる (2) の反論と密接にかかわる。フェレスダールのフレーゲ的解釈は、確定記述の省略として単称名辞をみなす「記述主義」にコミットしていると批判者は主張する。記述主義では、使用者が名前の担い手を同定的に指示することを可能にするのはこの記述の知識であると考えられる。

したがって、単称名辞の担い手は主体が保持する記述によって特定された性質を所有する唯一の存在者ということになる。

フェレスダールのフレーゲ的解釈が記述主義にコミットすると考えられる理由は、単称名辞のフレーゲ的意義とは言語的記述であり、その記述を通じて指示が決定されると考えられるためである。フレーゲ的意義を言語的記述と同一視する見解は、クリプキの『名指しと必然性』において提示されたが、クリプキの描像によれば、単称名辞の指示対象は記述を一意に充足する対象に他ならない。しかし、単称名辞の指示決定がその名辞に結びついた記述に尽きるならば、次のような問題を引き起こすとクリプキは主張する。「ゲーデル」という名前を使用する話者の多くは、「不完全性定理を最初に証明した人物」という記述を結び付けている。この記述は、特定の人物を一意に選び出すのに十分である。クリプキは次のような架空の状況を設定する。不完全性定理を最初に証明したのは、ゲーデルではなく、シュミットという無名の人物で、ゲーデルはシュミットの証明を剽窃した。このような架空の設定では、「不完全性定理を最初に証明した人物」という記述を一意に満たす人物はシュミットである。そのため、この記述を「ゲーデル」に結び付ける話者は、「ゲーデル」を使用してシュミットを指示する。しかし、クリプキによれば、われわれはそのような状況においても、「ゲーデル」を使用してゲーデル本人を指示しているのであって、シュミットを指示しているのではない(Kripke 1980, pp. 83–85, 邦訳 99–102 頁)。

この種のケースは、空想上の設定だけではない。「ラッセル」に「ラッセルのパラドクスを最初の発見した人物」という記述を結び付けている話者は少なくない。しかし、現在では、ラッセルのパラドクスを最初に発見したのは、ラッセルではなく、ツェルメロとみなされている<sup>4</sup>。記述主義に従えば、「ラッセルのパラドクスを最初の発見した人物」という記述をラッセルに結び付けている話者は、ツェルメロを指示していることになる。しかし、「ラッセル」という名前を使用する話者は、そのような記述に応じて、ツェルメロを指示しているわけではない。

これらのケースが示すのは、話者が単称名辞に結びつける記述が、特定の対象を一意に選び出せる場合でも、単称名辞の発話はその対象を指示しないことがある、ということである。そして、このようなケースは、話者の結び付ける記述と対象との一致が、単称名辞の指示決定の必要条件ではない、ということを示している。

ゲーデル＝シュミットのケースやラッセル＝ツェルメロのケースは、記述主義に

---

4. 1902年6月16日付け書簡において、ラッセルは『算術の基本法則』におけるパラドクスの発生をフレーゲに知らせたが、フレーゲ宛のヒルベルト書簡と、ツェルメロの1908年論文にすでにグッティンゲンの「ヒルベルト・サークル」ではそれ以前から同様のパラドクスの存在が知られていたとされている。このことを示す文献的証拠はヒルベルトとツェルメロの証言以外には見いだされないとみなされていたが、1902年4月16日付けのフッサールの遺稿中にツェルメロによるパラドクスの発見の報告があったとされる。cf. B. Rang & W. Thomas (1981) Zermelo's Discovery of the "Russell Paradox", *Historia Mathematica*, vol. 8, pp. 15–22.

対する重大な反例を提起する。これらのケースは、記述を満たす対象の同定とは独立に、固有名の指示が成立するというを示す。適切に使用された固有名は、その話者の結び付ける記述による対象同定の能力の有無とは無関係に、その担い手としての対象を指示する。すると、記述主義の対象同定についての基準は、端的に誤りであることになる。このように、ゲーデル＝シュミットのケースは、記述主義の基本的着想に対する反例となる。ノエマとフレーゲ的意義をパラレルにみなすフェレスダールのフレーゲ的解釈を受け入れるならば、フッサールにもまたクリプキのフレーゲ批判が適用されることになることになる。

### 2.3. 直接指示

(3) は指示決定のメカニズムにかかわる批判である。すなわち、フェレスダールの解釈を受け入れると、志向的表象はノエマという抽象的存在者によって媒介されるために、すべての指示が間接的指示になるという批判である。指示表現のクラスには、名前と確定記述の他に、人称代名詞（「私」、「あなた」）や時や場所の副詞（「ここ」、「いま」）などの指標詞ないし直示詞も含まれる。指標詞が特定の仕方ですれらの指示対象を提示するという事は疑いないが、指標詞の意味は発話依存的であり、指標詞を含まない‘the *F*’のような記述によっては捉えられない。ペリーが指摘するように、いかなる指標詞  $\alpha$  および非指標的記述‘the *F*’についても、主体は  $\alpha$  が the *F* であるかどうか疑問を持ったり、あるいは考えてみたりすることが常に可能である（Perry 1993）。ペリーによると、指標詞や直示詞は記述によって置き換えることはできず、主体は直接的に対象を指示する。フェレスダールのフレーゲ的解釈が記述主義を採用するのであれば、このような指示に対して何らかの措置を取らなければならない。

### 3. フレーゲ的解釈は維持可能か？

以上のようなフェレスダールのノエマのフレーゲ的解釈に対して提起された批判が、ノエマ的意味をめぐる議論にどのような影響を与えるのかを検討しよう。

クリスチャン・バイヤーは、上述の批判それ自体は正当であると認めるが、フェレスダールのノエマのフレーゲ的解釈にあてはまらないと主張する。なぜなら、バイヤーによれば、フッサールは、内在主義、記述主義の立場をとっておらず、直接指示の可能性を認めるからである。以下では、どのようにバイヤーによって再構成されたノエマ解釈がこれらの批判を回避するのかを検討しよう。

### 3.1. 内在主義批判への応答

フェレスダールはテーゼ 5 において「まったく同一のノエマは唯一の対象に対応する」と明示的に主張するため、このテーゼを否定する Smith 1989 によって定式化された文脈依存的内在主義の余地はない。したがって、仮にノエマのフレーゲ的解釈が強い内在主義をとるとすれば、前述 2.1 で提示したザハヴィの挙げるすり替えられた缶の例が適用され、困難に陥るように思われる。さらにテーゼ 1 はその内在主義を示唆するように思われるが、バイヤーは Hua XX/1 を引用することにより、ノエマのフレーゲ的解釈を擁護する。すなわちバイヤーによると、フッサールはフェレスダールの解釈のように、ノエマ（より正確にはノエマの意味）と、意味のような存在者 (meaning-like entity) を同一視する (Beyer 2013, p. 76)。しかし、このことはフッサールが強い内在主義者であったことを示すのではない。

ノエマ的な説明: [‘signitive Intention’ という表現に含まれている] 記号 (signum) という語の響きには、そのような語の響きに基づくひとつの志向的 (ノエマ的) な性格が属している。そして、そのような性格によって、語が何かを「意味する」(bedeutet) のであり、それは単なる語の響きではなく、まさに語なのである。したがって、[言語表現が意味を有するという] 有意味性とは、ここでは、[その表現を] 理解しながら意識すること [そのような主観の意識] のうちで、語の響きに付随するようになる性格のことを言っているのである。一方で、意味それ自体は、思念されたことそのものである。つまり、今扱っている例では、「空虚な語義的志向」という意識様態において、直観とは縁遠い言明の中で思念されたものなのである。(…)

たとえば「それはクロウタドリである」(Das ist eine schwarze Amsel) のように、「それ」(das) や「これ」(dies) が単に主語の位置にある単純な事例の検討から始めよう。「それ」は偶因的表現 (okkasioneller Ausdruck) であり、その意味がそのつどの文脈に依存する表現である。(…)

「これ」[ママ] の意味は場合に応じて異なるが、ただしいくら変化しても、ある共通要素が保存される。そして、そのような共通要素がある故に、この種の多義性と偶因的複義性 (Äquivokationen) とは区別される。これらの場合のすべてにおいて、常に何か [直示的に] 指示されている (auf etwas hingewiesen)。(…)

単なる知覚の中には本来の意味 (die eigentliche Bedeutung) はないが、むしろ知覚を基盤として、ある新しい作用は、つまり知覚によって方向づけられながら、知覚とは区別されつつも知覚に依存する新しい作用、すなわち〈これ〉を思念する作用 (der Akt des Dies-Meinens) が形成されるのである。明らかに、こ



の作用が、本来の意味で意味付与をする作用である。(…)

というのも、いつも変わらない、認識可能な限り同じ対象がそれを通じて現出するもろもろの、互いに関連した知覚がさまざまにある中で、どのような知覚が根底にあるかに拘らず、直示的思念 (*das hinweisende Meinen*) は、同一であるからである。(Hua XX/1 text #2, §5. pp. 74–78)

フッサールによると、「それはクロウタドリである」のようなケースでは、直示詞「それ」が指しているある生き物が時々刻々見え方を変えていくとき、主体は異なる文脈に属する同一の対象からの知覚の多様体を得る。この発話ないし知覚判断が可能となる過程において、ノエマは対象の知覚情報を蓄積し、知覚に意味を与える。ここで重要な点は、ノエマは内在主義的に確定されるのではなく、そのつどの文脈における対象によって決定するという点である。つまり、バイヤーによると、フェレスダールの解釈は正しいが、この解釈はフッサールが志向的内容についての強い内在主義に立っていたのではなく、外在主義を受け入れていたことを示す。したがって、バイヤーによると、フッサールはノエマを文脈独立の狭い内容（『論研』では「一般意味作用」と呼ばれる）ではなく、文脈によって決定される広い内容（「そのつどの意味」と呼ばれる）と同一視する。そのつどの意味は、関連する発話の文脈に位置する対象、あるいはその文脈を構成する対象に依存し、これらの対象は通常、外的環境（たとえば話者の知覚環境）に属する。このことは、ノエマが外的環境に依存することを示す。

バイヤーは上の引用から、以下のようにノエマ的意味の外在主義的解釈を再構成する。すなわち、フェレスダールのテーゼ 12 が示すように、ノエマ的意味は、分離された知覚経験に関連付けられるのではなく、「知覚の多様体」全体、すなわち意識の時間横断的構造 (*transtemporal structure*) に関連付けられる。バイヤーはこの方針を「動的な方法」(*dynamic method*) と呼び、志向的内容と指示理論を貫く戦略と指摘する。

志向的状态および志向的経験は、まったく同一の対象もしくは事態が恒常的に変化し続けるあいだに表象される、特定の時間横断的認知的構造——動的志向的構造 (*dynamic intentional structures*) ——の瞬間的な構成要素とみなされる。

(Beyer 2013, p. 78)

動的な方法によって、われわれがどのように志向的对象を保持しうるのかという作用的アスペクトのもとでノエマ的意味を解釈することができる。ケヴィン・マリガンによる定式化を使用するならば、志向的内容は意識の分離された瞬間によって示される心理的タイプやスペチエスとして解釈されるのではなく、むしろこれらの心理的タイプやスペチエスなどの静的内容は「動的な内容からの抽象」として解釈される

(Mulligan 1995, pp. 195, 197)。動的内容は多数のデータを一つの対象のあらわれとして決定するシステムであるとバイヤーは指摘する。つまり、フェレスダールがテーゼ 12 の定式化で示すように、意識的な直示的指示ないし直示的同定のノエマの意味を個別化する場合、われわれは動的方法に従っているのである。

しかし、ノエマの意味はどのように志向的对象を決定することができるのかという問いがまだ残っている。ここでフッサールは「規定可能な X」と「地平」という二つの概念を導入することによって、回答を試みる<sup>5</sup>。志向的地平を構成する経験のすべては、「時間を通じた同一性の意味」(sense of identity through time)を保有するとバイヤーは指摘する (Beyer 2013, p. 79)。フッサールはそれらの経験が属する規定可能な X として意味を分類する。つまり、主体の二つの経験が同一の規定可能な X に属するのは、それらの経験が同一の対象を表象すると信じられる場合、かつその場合に限る。しかし、外在主義的アプローチのためには、このような対象の「内在的同一性」(internal identity) (Perry 1993, pp. 81 ff.) の基準だけでは不十分であり、規定可能な X の間主観的同一性の基準が必要となる。外在主義的アプローチでは、所与の経験に属する規定可能な X は、その一般的意味作用が単独で経験の指示対象を決定するのではなく、動的方法によって説明されなければならない。このように考えられた規定可能な X は、時間を通じて、地平が関連する統一的系列をさかのぼることによって指示対象の固定を可能にする。たとえば、主体がかつて知覚した特定の対象を再び知覚する場面を考えよう。この場合、対応する知覚的経験は、関連する系列に属する経験のすべてと同一の規定可能な X に属する。フッサールは 1913 年の草稿において、この知覚状況を「個体概念」(Eigenbegriffe) を用いて説明する。

私が「歴史的」地平なしに対象を見るときも、なおも対象は、「歴史的」地平を有している。私は様々に対象を経験し、その対象について「様々な」判断を下し、様々な機会に、それについての多様な知識を得、そしてそれらを結びつける。この結びつきのおかげで、いま私はその対象についての「概念」、すなわ

---

5. 指示の意識的直示作用はそれらの単称性 (Singularität) によって性格づけられるとフッサールはみなす (Hua III/1, §30)。この作用によって主体は、すべての関連する可能世界において、そのつどの経験の志向的对象とみなされる特定の対象を表象する。つまり、われわれがどの対象を決定するかにかかわるすべての現実的状況ないし反事実的状況において、その経験によって表象された対象に他ならない。『イデーネー I』の第 47 節では、現実世界は、可能世界と可能的環境の多様体全体の特殊なケースとして考えられなければならないとフッサールは記す (Hua III/1, p. 100)。ここでの可能世界とは、主体の現在の経験に照らすと、所与の時間における経験の可能な推移、すなわち問題の経験に対して関連しうる推移に対応する。将来の経験はそのつどの時間における主体の経験内容から予想されるが、Smith and McIntyre 1982 によると、これらこそが経験の「志向的地平」とフッサールが呼ぶところのものを構成するのである (§§ V-VIII)。

ち個体概念 (Eigenbegriff) を所有する。(…) 記憶の中で、ある意味で措定されるものは、認識上の意味の豊かさを得る。すなわち、〈意味の x〉(das x des Sinnes) は経験によって (erfahrungsmäßig) より詳しく規定される。(Hua XX/2, supplement XLI, p. 358)

個体概念は、「無限に開いており、絶え間なく変化する」(in infinitum Offenes und Fließendes) (ibid., p. 359) とフッサール自身が特徴づける。バイヤーによれば、フッサールの個体概念は、後述の心的ファイルと等しい働きをする (Beyer 2008, p. 80)

フッサールの規定可能な X という概念のこの解釈では、少なくとも固有名と指標詞のケースとにおいて、(規定可能な X を含む) 志向的内容と、心の外の実在との密接なリンクがある。したがって、外在主義的に解釈された志向的内容は、指示対象に依存して決定されるのである。

### 3.2. 記述主義批判への応答

次に記述主義の問題である。フレーゲ的解釈が記述主義にコミットするならば、単称名辞の指示対象は、フッサールが「純粋なイデア的意味」(cf. Hua XXI/1, p. 279) と呼ぶ非指標的確定記述の一般意味作用によって一意的に決定されることになってしまう。しかし、この見解は意識的指示の強い内在主義を含意し、前節においてわれわれはこの立場が支持しえないことを確認した。たしかに、ノエマとフレーゲ的意義を類比的にみなすフェレスダールの解釈は、記述主義的に曲解されかねないが<sup>6</sup>、フェレスダールはフレーゲとフッサールが強い記述主義の立場を採用していたと主張しているわけではない。エヴァンズは単称指示についてのフレーゲ主義が記述主

6. フレーゲは「意義と意味について」において、以下のように記す。

「アリストテレス」のような本来的固有名の場合には、その意義についての見解が分かれるということは、当然ありうる。たとえば、その固有名の意義を〈プラトンの弟子で、アレキサンダー大王の教師である〉というように解することもありうるであろう。こう解する人は、「アリストテレスはスタゲイラで生まれた」という文に対して、この名前の意義を〈スタゲイラ生まれで、アレキサンダー大王の教師〉と解している人とは、異なった意義を結び付けていることになるだろう。(Frege 1892, p. 72, ft. 2, 邦訳 p. 43)

クリプキはこの脚注を典拠にフレーゲを記述主義とみなし、批判する (Kripke 1980, p. 30, 邦訳 33 頁)。しかし、飯田 隆はフレーゲが記述主義を採用していたことを否定する。

…フレーゲについて言えば、単称名の意義 Sinn が常に記述によって与えられると明言している個所は、かれの著作中のどこにもないということが挙げられる。それどころか、いかなる記述によってもその意義 Sinn を表現することができないような単称名が存在するという主張を、フレーゲから引き出すことさえ不可能ではない。(その典拠としてはフレーゲ晩年の論文「思想 Gedanke」での一人称代名詞の扱いがしばしば挙げられる)。(飯田 1995, pp. 329–330 ft. 13)

義にコミットしないと示したように、フレーゲ的意味論には非記述的意義 (non-descriptive sense) の余地が残されており、フレーゲの意義を記述主義的に解釈するのは誤りである (Evans 1982, 1985)。さらに、フッサール自身が強い記述主義を拒絶していたことを示す文献の証拠がある。

単独で名詞的に作用する場合の「それ」の類似するものは、「これ」であり、すでに考えられたことや以前に名づけられたものをさかのぼって指示する場合の「それ」であり、さらに同定を結び付ける場合の「同じもの」(dasselbe) であり、非常に一般的には、それらが指示する対象性のいかなる実体的部分も概念的に指示しない表現のクラスに属するすべての名詞表現 (jedes Nominal) である。  
(Hua XX/1 text#2 §5, 78)

ここでフッサールは、直示詞が概念的に指示しないということを明示的に認めており、記述主義のように直示詞を非指標的記述によって解釈することを拒絶する。さらに、フッサールは 1908 年の研究草稿において、ドネランの確定記述の指示的用法と帰属的用法の区別を先取りし、直接指示、すなわち単称指示という作用があるという見解を擁護する (cf. Hua XXVI, suppl. XII, pp. 170 f.)。したがって、フェレスダールのフレーゲ的解釈が意義とノエマをパラレルにみなすために、記述主義に陥るという批判は回避することができる。

### 3.3. 直接指示

最後に直接指示の問題に移ろう。この反論は、抽象的かつ無時制的対象である意義ないしノエマを媒介して対象を指示することをノエマのフレーゲ的解釈は含意するとみなされるために生じる。同種の批判は、フレーゲとラッセルの往復書簡においてもすでに顕在化していた。ラッセルは指示が意義によって決定されるというフレーゲ的意味論を採用すると、すべての指示は間接的指示になり、直接指示が不可能になるとみなした<sup>7</sup>。そのため、ラッセルは固有名の意味論的役割は指示機能に尽きるとみなす一次的意味論を主張することになった。

しかし、意義によって指示が媒介されるというフレーゲ的意味論においても、対象との知覚関係などの直接的な結びつきを保持することが可能であるため、この反論に対してもフレーゲとフッサールのパラレルな関係は維持可能である。この点を明らかにするために、以下ではフレーゲ的意義の洗練を試みる心的ファイル・フレームワークの議論を援用し、ノエマのフレーゲ的解釈の可能性を探ろう。

7. Frege 1976, pp. 245, 250–251, 邦訳 168–169 頁、161 頁

#### 4. ノエマと心的ファイル

バイヤーによれば、ノエマと心的ファイルは強い親近性をもつ。実際、心的ファイルの代表的な主張者であるフランソワ・レカナティは、バイヤーの研究を参照しつつ、ファイル概念の源泉のひとつとしてフッサールのノエマを示唆する（Recanati 2012, pp. vii–viii f）。

レカナティの主張する心的ファイルとは、特定の対象について獲得した様々な情報を蓄積する主体の心的機能をファイルというメタファーによって説明した概念である。心的ファイルは、認知環境における特定の対象についての様々な認知関係に基づくが、この際に異なる認知タイプの関係は異なる認知タイプのファイルと対応する。たとえば、夏目漱石の本名が「夏目金之助」であることを学んだ人物は、ある特定の人物について〈夏目漱石〉と〈夏目金之助〉という二つのファイルをもつ。この二つのタイプのファイルによって「夏目漱石」と「夏目金之助」という二つの固有名の認知的重要性の差異を説明することができる。レカナティによれば、心的ファイルは単称名辞のように対象を直接的に指示するのではなく、そのファイルを制作する際に主体と対象の間の認知的関係によって個別化されたフレーゲの意義に相当する役割を果たす。

しかし、前述のようにラッセルはフレーゲの意味論を受け入れると、指示は意義を媒介するために対象との直接的な結び付きが失われ、直接指示を放棄することになると批判した。このようなラッセルの批判はフレーゲの意義を記述的に解釈することによって生じる誤りであるとレカナティは主張し、新フレーゲ主義者とりわけエヴァンズの議論を援用することによって回避できるとみなす。すなわち、指示対象を確定するための記述条件を与える記述的意義に加え、記述による概念的な媒介をとみなさない非記述的意義の余地がフレーゲの体系において残されており、この非記述的意義によって直接指示を取り扱うことができるのである。

しかし、非記述的意義とはなにかという問いが残る。レカナティは、その非記述的意義こそが、彼が導入する心的ファイルに他ならないと主張する。この着想は萌芽的にエヴァンズにも含まれており、レカナティはこのエヴァンズの着想を展開し、統一的にファイルのオペレーションを説明するフレームワークを提示する（Evans 1973, p. 199ff）。

心的ファイルは、主体の認知環境における特定の対象についての様々な認知関係に基づくが、この際に異なるタイプの関係は異なるタイプのファイルと対応する。そして、主体がファイルを制作するためには、特定の対象との「見知り関係」（acquaintance relation）を必要とする。見知り関係の典型例は、個体的対象についての知覚的關係であり、その言語的表現は「私はこれを  $x$  として見る」という形

式の知覚文である。この文における「これ」という直示詞は、名指された対象との直接的指示関係を示すだけでなく、当該の対象が知覚者にとって共通の空間に現前することを示す<sup>8</sup>。知覚的見知りにより、主体は知覚した対象の「単称性」(singularity)を把握することができるのである。

しかし、ファイルを作成するためには、必ずしも主体は対象との知覚関係をもつ必要はないとレカナティは指摘する。デイヴィッド・ルイスが「認識的疎通関係」(epistemic rapport)のアナロジーによって説明した、一般化された見知り関係、すなわち会話や伝達においてわれわれに言及された対象に対する「共同体を媒介した身元保証関係」(community-mediated testimonial relations)においてもファイルを獲得することができる(Lewis 1999, pp. 380–81)。つまり、言語的共同体によって継承された因果的連鎖に主体が参与することによって、特定の対象についての関係をもつことが可能となるのである。レカナティは、この一般化された見知り関係を「認識的に有益な関係」(epistemically rewarding relation) (ER 関係)と称し、ファイル獲得のための条件とみなす。そして、このようにして獲得されたファイルには関係する対象の情報が蓄積され、主体はそのファイルを通じて指示を行い、思考することが可能になるのである。

## むすびに

以上のように本稿では、フェレスダールのノエマ解釈に対する3つの批判を検討し、ノエマのフレーゲ的解釈の維持可能性を確認した。ノエマはフレーゲ的意義のようなある種の抽象的存在者としての〈意味〉であり、動的方法によって文脈や外的環境を通じて指示対象を決定する外在主義アプローチに適合する。そして、ノエマはレカナティの心的ファイルのように非記述的意義として作用し、直接指示を可能にするというのが本稿の結論である。フェレスダールの示唆したノエマのフレーゲ的解釈は現代のフッサール研究と分析哲学を架橋する可能性をいまなお秘めているのである。

## 文献一覧

本稿におけるフッサールの引用・参照は、『フッサール全集』(Husserliana)にもとづく。『全集』の巻数とページ数は、それぞれ大文字ローマ数字、アラビア数字で示

---

8. この知覚的見知りは、フッサールのノエマ論においても重要な働きをする。ノエマ論における直示詞の重要性については、Smith 1983, Smith & McIntyre 1982 を参照していただきたい。

される。

- Beyer, B. (2008) Noematic Sinn, in F. Mattens (ed.) *Meaning and Language: Phenomenological Perspectives Phaenomenologica* vol.187, pp. 75–88
- . (2013) Noema and Reference. in M. Frauchinger (ed.), *Reference, Rationality, and Phenomenology: Themes from Føllesdal*, Frankfurt, ontos, pp. 73–88.
- Dreyfus, H. (ed.) (1982) *Husserl, Intentionality, and Cognitive Science*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Evans, G. (1973) The Causal Theory of Names. *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supp. Vol. 47: 187–208. (邦訳「名前の因果説」池田 さつき、佐藤 康之、松坂 陽一訳、『言語哲学重要論文集』松坂 陽一編、春秋社、2013 年)
- . (1982) *The Varieties of Reference* (edited by J. McDowell). Oxford: Clarendon Press.
- . (1985) *Collected Papers*, Oxford: Oxford University Press.
- Føllesdal, D. (1969) Husserl's Notion of Noema, reprinted in Dreyfus (ed.) 1982.
- Frege, G. (1892) Über Sinn und Bedeutung, in Frege (1967) (邦訳「意義と意味について」野本 和幸訳、『言語哲学重要論文集』松坂 陽一編、春秋社、2013 年)
- . (1967) *Kleine Schrifte*, hrsg. I. Angelelli., Hildesheim, Olms.
- . (1976) *Wissenschaftlicher Briefwechsel*, hrsg. G. Gabriel, H. Hermes, F. Kambartel, C. Thiel, und A. Veraart, Hamburg: Felix Meiner (『フレーゲ著作集第 6 巻—書簡集付「日記」』野本 和幸編訳、勁草書房、2002 年)
- Kornblith, H. (ed.) (2001) *Epistemology: Internalism and Externalism*, Blackwell Publishers
- Kripke, S. (1980) *Naming and Necessity*. Oxford : Blackwell.
- Lewis, D. (1999) *Papers in Metaphysics and Epistemology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perry, J. (1980) A Problem About Continued Belief. *Pacific Philosophical Quarterly* 61: 317–332.
- . (1993) *The Problem of the Essential Indexical and Other Essays*. New York: Oxford University Press.
- . (2000) *The Problem of the Essential Indexical and Other Essays*, expanded edition. Stanford: CSLI.
- Recanati, F. (1993) *Direct Reference: From Language to Thought*. Oxford: Blackwell.
- . (2012) *Mental Files*. Oxford: Clarendon Press.
- Smith, D. W. (1983) Husserl's Philosophy of Mind, in G. Fløistad (ed.) *Contemporary Philosophy*, vol. 4, pp. 249–286.
- . (1989) *The Circle of Acquaintance: Perception, Consciousness, and Empathy*, Dordrecht: Kluwer
- Smith, D. W. & McIntyre, R. (1982) *Husserl and Intentionality: A Study of Mind, Meaning and Language*, Springer
- Zahavi, D. (2003) *Husserl's Phenomenology*, Stanford: Stanford University Press. (邦訳『フッサールの現象学』工藤和男、中村拓也訳、晃洋書房、2003 年)
- . (2004) Husserl's noema and the intennalism-externalism debate, in *Inquiry* vol. 47, pp. 42–66
- 飯田 隆 (1995) 『言語哲学大全 III — 意味と様相 (下)』勁草書房